

同志社大学

2011年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2012年 4 月 3 日提出

所 属	職 名	氏 名
心理学部	専任講師	田中あゆみ
研 究 題 目	接近・回避目標が注意のコントロール機能に及ぼす影響	
研 究 成 果 の 概 要	<p>本年度は、接近・回避目標が注意のコントロールに与える影響を検討するために、実験および調査を1件ずつ行った。</p> <p>第1に、11年6月に Dreisbach & Goschke (2004) の開発した課題を用いて、接近および回避目標の注意のコントロール機能への影響を大学生 43 名を対象に検討した。この実験では、正解するごとに賞金が増えることを教示する接近目標群、不正解があるごとにあらかじめ約束していた賞金が減ることを教示する回避目標群、賞金のことは伝えられない統制群の3群に被験者を分け、課題における注意維持の成績と注意の柔軟なシフトの成績を比較した。実験の結果は現在分析中であり、12年の日本心理学会あるいは13年のヨーロッパ教育心理学会にて発表する予定である。</p> <p>第2に12年1月に、大学生 154 名を対象に接近・回避動機づけと個人目標および学業達成との関連を調べる調査を行った。これは Gjesme & Nygard (1970)の接近と回避の達成動機づけの尺度の標準化に向け、項目の得点分布や信頼性、妥当性を検討するための調査であった。尺度野構成概念的妥当性、併存的妥当性を検討するために BIS-BAS 尺度日本語版（高橋ら、2007）を実施した。また、予測的妥当性の検討には、個人の目標の自由記述における接近-回避傾向と動機づけとの対応があること、また、講義の成績と接近動機づけとの正の関連、回避動機づけとの負の関連が見られることを仮定した。調査結果は分析中であり、12年に日本教育心理学会において発表予定である。</p> <p>以上の研究より、動機づけと注意コントロール機能の基本的な関係性が解明されると同時に、より広範な目標達成行動との間接的な関連の解明につながる事が予想される。学会発表された成果は12年度中に専門学会の学会誌に論文としてまとめて投稿する予定である。</p>	